

サルトル『道徳論ノート』における創造の意義  
—無からの創造に対する批判と存在に基づく創造の提起をめぐって—

筑波大学大学院 畑田晃佑

はじめに

ジャン＝ポール・サルトルは、哲学、文学、政治などの多方面にわたって思索を展開した人物として知られるが、彼には生涯を通して関心を抱き続けていた問題があった。それは、道徳（倫理）に関する問題である。実際、彼は倫理学の構想に三度ほど着手しており、その関心の高さは、晩年の彼自身による「私は道徳哲学者であることをやめたことはない」という発言からも明らかである<sup>(1)</sup>。

遺稿『道徳論ノート』（1983）は、『存在と無』（1943）の結論部で予告された倫理学のための草稿である。その遺稿において構想された倫理学は、「自由な実存者」として規定される人間存在に対して、「本来性」を要請する<sup>(2)</sup>。では、具体的に何が要請されるのか。『道徳論ノート』によれば、「本来性は、唯一妥当な企てがつくる＝為す企て（在る企てではなく）であることを見出す」（CM491）とされる。つまりその要請とは、「創造（*création*）」の行為に価値を置くことなのである。このことは、以下の箇所により明確に述べられている。

本来性は、われわれが創造の刑に処せられていることを、われわれにあらわにするだろう。と同時に本来性は、われわれが刑に処せられているその創造であらねばならないことを、われわれにあらわにするだろう。自由の構造そのものは、われわれに創造を強いる。[……]われわれはその創造であらねばならず、創造が意味を持つことは自明なのだから、これから創造の意義とは何かをあらわにしなければならない。（CM530）

このように本来性の倫理学においては、創造の問題が一つのテーマとして浮かび上がる。サルトルが言うところの倫理的地平における自由とは、「選択の自律性」としての自由である。人間は本来的に自由であり、自由の構造そのものが人間を創造へと差し向ける。その意味で、「人間は創造者である」（CM524）。ゆえに人間の創造行為は、自らが本来的に自由であること、つまり本来的自由の発現に他ならないのである。

本稿は、『道徳論ノート』における創造論を概観し、サルトルその人が提起した「創造の意義とは何か」という問いの解明を目指す。まず第一節では、『道徳論ノート』における神による創造の議論に着目する。そこにおいて彼は、無からの創造が矛盾に陥るという見解を示すことで、創造の前提条件が無からの出発ではなく、存在への依拠であると主張する。この点を第一節で明らかにする。と同時に神による創造の議論が、非本来的人間の在り方をあらわにするための基盤になっていることも明らかにする。次いで第二節では、存在に基づくという創造の条件が、本来的人間による創造に関する記述のうちに表れていることを確認し、その創造の特徴を素描する。そして第三節では、『道徳論ノート』の創造論が、技師と芸術家という具体的創造のタイプへと最終的に展開されている点に着目する。それらのタイプを考察することで、創造に伴う《意味生成の契機》と《想像力の契機》において、その意義が垣間見える可能性を提示する。

### 第一節 神による創造

サルトルは、創造の問題を分析するにあたって、以下の課題を提示する。

1. 我有化または同一化の諸活動のもとで創造をあらわにすること。
2. 〈創造〉の形而上学的神話と存在論的構造としての創造を区別すること。
3. 後者の創造の意義をあらわにするための導きの糸として、前者の創造を捉えること。(CM530-531)

第一の課題については後ほど触れることとし、本稿は第二の課題を議論の出発点としたい。「〈創造〉の形而上学的神話」とは、神による「無からの創造 (*création ex nihilo*)」を指し、「存在論的構造としての創造」とは、人間による創造行為を指す。さしあたり前者に関する検討から始めるが、そこに見出されるのは、無からの創造に対するサルトルの批判的見解である。

#### I. 無からの創造に対する批判

サルトルの批判は、自己創造と世界創造という二つの地平で展開される<sup>(3)</sup>。

まずは自己創造に対する批判を見てみよう。彼によれば神は、それ自体で存在が充実している即自的性格と、自己を認識しうる意識の対自的性格が総

合された、「即かつ対自」として規定される。このような神が自己を無から創造するという事態は、自己原因の概念をもってして論じられる。つまり神にとって、自己の存在およびその認識の根拠は、自らに帰せられるのである。そのため、自己原因の構造においては、「結果が原因であり、原因が結果である」という、「原因と結果の[……]相互関係」が見出されるのである(CM533)。

しかし、彼によれば、「その関係が合理的であったとしても、原因と結果の区別が、〈自己原因〉のそれら二つの側面の間に後退(recul)の契機[……]を導入する」(CM533)と言う。このことは、自己を根拠づけるために、「自己に関する後退」が必要であることを意味する。換言すれば、自らの構造のうちに「無(néant)」ないし「かすかな裂け目(fissure légère)」が必要なのである。この無は存在に支えられ、存在の懐に与えられる<sup>(4)</sup>。つまり無が存在の否定である以上、それは存在を前提にする(無に対する存在の先行性)のだから、自己における無の分泌(無化作用)は、存在を背景にして遂行されなければならないのである。だとすれば、神による自己創造であれ、それは存在に基づく必要があるということになる。彼が言うところの存在とは、その出現が根拠づけられずにただ在るという事態を指す。この意味において存在の特徴は、偶然性である。以上の点から、「神が自らを引き出すのは、〈無(Néant)〉<sup>(5)</sup>からではなく、偶然性からである」(CM535)と結論づけられるのである<sup>(6)</sup>。

次いで世界創造に対する批判を見てみよう。彼は以下のような見解を示している。

1) 創造された存在は、全く新たな出現である。それゆえ、ここでは神に対して新しいのである。

2) 出現だけでは十分でなく、創造は意図から生じる必要がある。さもなければ、創造は創造者に対して無差別の純粋な外面性になるだろう。

3) しかしながら、この意図は、創造それ自体であることもできず(さもなければ、われわれは主観性のうちにとどまるだろう)、語の通常の意味における因果性であることもできない。なぜなら、結果はその原因以上のものを何も持たないからである。もし被造物がその原因以外の別のものを何も持たないならば、それは新しくない。もし被造物が別のものであれば、それは原因と結果の純粋な関係に帰着しえない。(CM539)<sup>(7)</sup>

無からの世界創造において、被造物は新たな出現であり、それは創造者の意図から生じる。では、この事態はどのように説明できるのだろうか。結果は原因以上のものを何も持たない—デカルトによる神の存在論的証明において用いられる公理を念頭に置いて換言すれば、原因のうちには結果と同等以上の実在性ないし完全性が含まれている—という因果性に依拠して、被造物の新しさは証明できない。なぜならその場合、結果（被造物の存在）は、原因（創造者の意図）のうちに包含されていたものが世界に反映されただけにすぎないからである。実際、サルトルは、「神がまさに存在全体であり、世界が反映としての現実存在を神の意志から引き出すならば、〈創造〉以前よりも以後の方がより存在するということはない」（CM537）と言う。要するに世界創造が創造者の主観性のうちにとどまるがゆえに、新たな出現についての説明ができないのである。だとすれば、因果性を放棄することで、無からの世界創造を説明できるだろうか。答えは否である。なぜならその場合、被造物は創造者の意図以外のところから出現したこととなり、創造は意図から生じるという条件に背いてしまうからである。つまり「結果が原因以上のものを持つならば、その結果は無根拠の出現であり、創造ではなくなる」（CM157）のである。このように新たな出現と因果性の問題をめぐって、「事実、そこに創造という考えの本質的困難がある」（CM539）と言える。

以上見てきたように、無からの創造は、一方で存在を背景とせず自己を根拠づけようとする矛盾、他方で被造物の新しさを証明できない困難を抱えている。この事態は、創造が無から出発しえないことを意味する。だとすれば、創造の出発点はどのように考えるべきなのだろうか。サルトルは、無からの創造の不可能性を指摘することで、「創造を支えるのは〈存在〉である」（CM536）というテーゼを導出する。つまり創造の出発点は、存在への依拠なのである。この点は次節以降の検討においてより明確になるだろう。

## II. 神と非本来的人間

ところでサルトルは、神による創造に対する批判に徹しているように思われる<sup>(8)</sup>。しかし、「この議論によって、われわれにとっての問題は、絶対的創造の神話を反駁することではなく、創造の考えについてのわれわれにとっての意味の観点から、この奇妙な帰結をただ提示することである」（CM533）と述べられている点に留意すべきである。「奇妙な帰結」とは、神による自己および世界の創造が矛盾や困難を孕むことを指す。では、神による創造の分析に着手した彼の真の狙いはどこにあるのだろうか。それは、本節冒頭（本稿2頁）で引用した課題（CM530-531）の三つ目を想起することで明らかとな

る。つまりその狙いは、人間による創造を解明することであり、その解明に資する分析として神に関する創造論が展開されていたのである<sup>(9)</sup>。例えば、その狙いの一端は以下の箇所に見出される。

神は自らを根拠づける虚しい務めに投げ出され、すでに存在しているがゆえに自らを創造できない非本来的人間である。自らによる自己の絶対的創造は、考えることさえできない夢である。(CM536)

ここでは自己を創造しえない神が非本来的人間になぞらえられている<sup>(10)</sup>。自己につきまとう存在の偶然性は拭い去ることができないため、自己の出現を必然的なものとして根拠づけようとする行為（自己原因者であろうとする企て、即かつ対自の追求）は、実現不可能であり、挫折の運命にある。本来性の倫理学では、このような行為が非本来的な企てとして位置づけられる。この点に鑑みれば、神による創造の分析は、非本来的人間の在り方をあらわにするための理論的基盤になっていると言えるのである。

ただしここで留意すべきは、「まず創造は〈即かつ対自〉の虚しい追求である」(CM156)と言われるように、非本来的な企てであっても、それは存在論的構造としての創造の一種に他ならないという点である。そのため、人間による創造には、非本来的次元と本来的次元のものがあ<sup>(11)</sup>り、本来的人間に要請されるのは、前者の次元における創造ではないということをおさえておこう。

## 第二節 本来的人間による創造

『道徳論ノート』における創造概念を整理するならば、それは神による無からの創造と人間による行為としての創造に区別され、さらに後者には二つの次元があるということになる。創造の意義を考察する上で鍵となるのは、まさに本来的人間による創造である。その創造に関しては、神による創造の分析後に以下のように述べられている。

そこからわれわれは、道徳にとってより直接的に興味深く新しい帰結を引き出しうる。

1. 〈存在〉は、創造以前も以後もいたるところに無限に在り、全ての

創造を存在で支えるので、人間は、自己自身の存在の無である限りにおいてのみ創造できるのであり（想像力）、全ての人間の創造は、〈存在〉を介して〈存在〉に支えられている。

2.それゆえ人間は、意味あるいは存在様態だけを創造する。

3.しかし、これらの意味あるいは存在様態は、意味として一つの存在をそれ自体で有している。また、それゆえ人間は、存在の創造者でもある。

4.これらの意味は、〈他者〉によって客観的に認められる限りにおいてのみ人間的世界のうちに現れうる。

5.しかし、人間的世界は、意識の絶対性のうちで自己自身を自ら引き受ける絶対的な諸意識からなる一つの世界なので、人間の創造は、絶対的なものである。[……]

6.人間は創造することで自らを創造する。[……] (CM543)

存在への依拠という条件は、本来の人間による創造の特徴として如実に示されている。真の創造とは、存在に基づき、存在のもとに種々の「変容」をもたらすものである<sup>(12)</sup>。いわばそれは、「存在から存在への伝達」(CM157)であるとされる。この変容ないし伝達が、人間的世界に新しい意味や存在様態を出現させる。「新しいもの」が出現しうるのは、創造以前の存在の關係に対して、以後の關係が変化したからである。この点において人間は、存在自体を創造するのではなく、意味あるいは存在様態だけを創造するのである。

とはいえ、「意味は〈存在〉のうちで現実化された觀念である」(CM559)のだから、意味を存在 (l'Être) から派生した「一つの存在 (un être)」として位置づけることもできる<sup>(13)</sup>。この点から見れば、人間はある種の「存在の創造者」である。また意味は、恣意的に生成されるものではなく、他者によって客観的に認められる限りで現れる。創造における他者の必要性は、『文学とは何か』(1948)のうちで具体的に提示されている (QL58-59)。そこでは、「呼びかけ」を通じた作家と読者の相互承認關係が、文学的創造を可能にするとされている<sup>(14)</sup>。

さらに人間的世界は、自己自身を自ら引き受けるような複数の絶対的意識が種々の意味をもたらすことで成立しうるという点に鑑みれば、人間による創造は、「絶対的なもの」であり、その創造を通じて人間は自らの創造へと向

かうのである。むしろ人間は、存在自体を創造しえないので、自らの創造とは、自らの存在様態に関する創造として解釈すべきであろう。

以上が本来的人間による創造の特徴である。とりわけ本稿は、その創造が存在に基づくという特徴と、意味生成や想像力に関わるという特徴の考察に傾注する。『道徳論ノート』における創造論は、具体的創造の二つのタイプに関する分析へと最終的に展開される。そのタイプとは、技師（建築家）と芸術家（画家）である<sup>(15)</sup>。実を言えば、本稿が傾注する特徴は、まさにこれらの創造のタイプのうちに表れるのである。

### 第三節 技師と芸術家による創造

#### I. 技師による創造

技師の創造は、現実的対象を生み出す。例えば、家や橋の建築がそれにあたる。家や橋は、技師が存在のもとに種々の変容をもたらすことで出現するのである。

「存在の観点」からその創造を見れば、創造以前と以後で存在自体は増減していないので、事実上、何も起きていないとされる。創造後もただ存在が在るにすぎないのである。しかし、「人間の観点」からその創造を見れば、「〈存在〉が一つの投企にその存在を貸し与えた」（CM558）という事態（「存在の貸与（prêt d'être）」）を通じて、家や橋が新たな存在様態として世界に出現するのである。この点に関して、サルトルは以下のように言う。

人間的世界のうちには新しいものがある。新しいものは、〈自然〉に対して絶対的にそれ自体で新しいのである。何が新しいのか？意味である。では、意味とは何か？客観化された観念である。人は皆の前で創造者に面して観念を出現させる限りで、観念を客観化する。（CM459）

技師の創造においては、創造された存在様態に伴う意味が、自然（存在）との関係で新しいのである<sup>(16)</sup>。一つの観念は、はじめは主観的なものとして生じるが、それが他者および創造者自身の面前にさらされ、そこで他者の承認によって現実化されるとき、その観念は客観性を帯びた意味として開示されるのである。

このような技師の創造の根源には、「必要＝欲求（besoin）」がある（CM552）。例えば、家は生活を安定化させる居所として必要であるがために建築される。

必要＝欲求は欠如者としての人間においてのみ生じるものであり<sup>(17)</sup>、人間は必要の充足を目指す。それゆえ技師の創造においては、必要を満たすために行為を通じて世界を変容させること、換言すれば、「道具的領野」の構築こそが関心事となるのである<sup>(18)</sup>。

しかし、技師の創造が世界を変容させる努力として際限なく遂行されるならば、どのような事態がそこで生じるだろうか。その努力によって目指されるのは、「世界を純粋な道具的存在に、つまり世界を私の存在の意図的保存に必須の手段に変える」(CM554) ことである。この目標に向けて推し進められた創造行為は、世界を我がものにする企てとなる。この意味において、第一節の冒頭(本稿 2 頁)で引用した課題(CM530-531)の一つ目で示されているように、創造が「我有化」のもとであらわになるのである。だとすれば、ここにおいて創造は、もはや本来的自由の発現として価値づけられるものではなく、「道具的存在」を生み出す手段へと転倒していると言えよう。このように技師の創造は、本来的人間による創造と相容れない方向へと展開しうるのである。

また、技師の創造は、「存在の貸与」を通じて遂行されるが、サルトルが言うところの存在とは、それ自体で充実し、いわば「かたまり的(massif)」なものである。このような存在が観念に惰性を与えるのである。客観化された観念(意味)は、時とともに即自的なものへ変貌し、「人々が技術化を望む世界」(CM561)における観念同士の諸関係は、惰性が基盤となる。さらに彼によれば、技師が創造する対象は、人間的世界において、「純粋な無機物と生物との中間物」として現れ、いわばそれは、機械的なものと精神的なもの、客観的なものと主観的なものなどの間の「存在のちらつき(papillotement d'être)」であるとされる(CM460, 562)。実はこの不安定な混合物が、創造者に対して受動性を与える転倒を生み出し、人間は疎外に陥るのである<sup>(19)</sup>。

以上の点に鑑みて、技師の創造について整理しよう。新たな意味を出現させるという契機に限れば、その創造は、本来的人間による創造の特徴を有している。意味生成を可能にする本来的自由の行為としての意義がここに認められると言えよう。しかし、技師の創造が必要の充足として際限なく遂行されると、その創造は、道具的存在をもたらす手段として位置づけられるようになる。また、新たな意味が生成されても、それは技術的世界において即自的なものへ変貌し、さらに創造された対象は、人間を疎外に陥れる要因となる。このように技師の創造のうちには、本来性と非本来性という異なる次元に関する特徴が見出されるのであり、とりわけサルトルの記述は、後者の次元に集中している。「総かり立て体制」として技術に対する危機を示したハイ



デガールの分析 (FT26-29) とまではいかないが、サルトルの分析のうちには、技術に対する危機が、その創造に関する消極的側面として見え隠れしていると言えよう。

## II. 芸術家による創造

サルトルは、芸術家の創造の具体例として、絵画や彫刻の制作を取りあげている。それらの制作には、「大理石の形態は彫刻家が大理石に対して技術的に課すある輪郭である」(CM568)、「キャンバスは技術的作用の対象ではない」(CM569)と言われるように、技師的要素が含まれている。芸術家も技師と同様に、存在のもとに種々の変容をもたらすことで、人間的世界において新たな存在様態（例えば、大理石やキャンバスに刻まれた何らかの形態）を出現させるのである。

しかし、技師と芸術家の創造には相違もある。技師は現実的对象に付随する意味生成だけに関わるのに対して、芸術家は現実的对象を通じて、人々を「想像的なもの」へと誘うことに関わる。つまり絵画は、意識が不在ないし非実在の対象を志向する契機となる「アナログン」として生成されるのである<sup>(20)</sup>。また、技師の創造の根源には「必要」があり、その充足のために世界の我有化が目指されていた。それに対して芸術家の創造においては、「欲望」が鍵となる。しかし、そこでは欲望の充足が主たる関心事ではない。「芸術は欲望を満たす手段よりも、欲望の創造力に関心を持つ」(CM566)のである。技師においては、創造が手段へと転倒する方向に展開されたが、芸術家においては、創造それ自体に価値が置かれる。なぜなら芸術においては、むしろ欲望をかき立てることで、その欲望に備わっている「創造力」を芸術的創造の原動力にすることが重視されるからである。

したがって、芸術家の創造には、技師的要素が含まれるとはいえず、技師のような意味生成の契機が伴うわけではないのである。技師の創造がもたらす客観的観念は、時とともに即自的なものへ変貌する。そこに見出されるのは、現実的世界で惰性化した観念、いわば死せる観念である。それに対して芸術家の創造は、人々を想像的なものへと導き、欲望を原動力としてさらなる芸術的創造へとかき立てる。その創造がもたらすのは、想像的世界で生成過程のただなかにある観念、いわば生きられた観念なのである。

ところで芸術は、欲望によって、想像的对象が「望ましいものの形態 (*forme d'un désirable*)」で提示されるような「欲望の世界」を産出するとされる<sup>(21)</sup>。この点に関してサルトルは、「芸術は自らを欺く」(CM568)と言う。欲望の世界は、ある価値観や目的に沿った世界であり、その世界の出現には、想像

主体による秩序づけが不可欠である。このような意味で、その世界は想像主体にとって必然的性格を持つ。そして想像主体は、欲望の世界を産出するために、出現の根拠が自らの埒外にある世界、つまり存在の偶然性に基づく現実世界を無化するのである。だとすれば、芸術家の創造は、現実世界の偶然性から逃れ、想像的領域において必然性を見出すためのある種の「まやかし」として位置づけられるという解釈も可能になる。実際、芸術家の創造は両義的なものであり、未完の遺稿におけるその創造の位置づけを完全に確定することは困難であるように思われる<sup>(22)</sup>。

しかし、このような位置づけの困難性が芸術家の創造の意義を覆い隠すわけではない。その創造の可能性は、以下の箇所に表れている。

事実、存在論的構造における想像力は、技術的創出からそれほど離れてはいない。というのも、想像力が捉える不在の存在は、すでに現実存在している一つの存在<sup>(23)</sup>（アナログン）に基づくからである。ただし技術的創出は、その存在と世界との関係の配置に耽っている。反対に想像力は、回復と主体性の契機である。[……] 想像力の契機は、主体性の契機である。それは欲望が自己回復する契機でもあり、ゆえに欲望が最も意識され、最も実存する契機でもある。要するにそれが問題となる契機である。(CM565)

「想像力の契機」は、技師が作業を遂行するために自分が何を望んでいるかを意識する際にも訪れるが、その場合それは、副次的要素として現実世界の関係構築という全体のうちに吸収される。それに対して、芸術家の創造に伴う「想像力の契機」は、主体性が発揮される自由の契機であり、またそれは、創造の原動力となる欲望が自己回復する契機でもあるため、さらなる芸術的創造へと向かう契機にもなりうる<sup>(24)</sup>。

芸術家による創造の意義の本筋は、芸術的対象の創造者として在ることではない。また創造された対象は、アナログンにすぎないのであるから、対象そのものに何かしらの意義が認められるわけでもない。その意義は、創造に伴う想像力の契機において、本来的自由が発現する点に見出されるのである。

## おわりに

サルトルは、無からの創造に対する批判的見解を示すことで、創造が存在

に基づくものであると提起する。存在への依拠は、まさに本来的人間による創造の構成要素の一つである。そして本稿では、技師と芸術家の創造に関する分析に着目し、それぞれの創造の内実を明らかにしつつ、創造に伴う契機において本来的自由の発現が見出されることを示した。その契機とは、技師の創造において、新たな意味が生成される契機であり、芸術家の創造において、人々のうちに生じる想像力の契機である。創造に関する意義の解明を目指すなかで、種々の創造概念を整理できた点と、その意義が《意味生成の契機》と《想像力の契機》において垣間見える可能性を提示できた点は、本稿の成果である。

しかし、本論だけで創造に関する意義の解明が完遂されたわけではなく、未解決の課題も残った。本稿では、創造に伴う二つの契機について、詳細に論じるまでには至らなかった。本稿の試みを基礎的作業として位置づけ、そこにサルトルの別の著作との比較検討を加えることによって、議論の彫琢および具体的展開に着手することが今後求められる。

#### 注釈

- (1) シカールによるサルトルへのインタビューを参照 (Sicard 1989: 344)。
- (2) 本来性の倫理学については、Anderson 1993: 43-86、Münster 2007: 13-41、水野 2004: 11-67 などが詳しい。
- (3) 本項の議論については、根木 2019: 167-170 を参照。
- (4) EN56-58, 64 も参照。
- (5) ここにおいて「無」は、大文字（無からの創造と言う場合の「無」）と小文字（自らの構造において生じる「無」）で意味が区別されている。
- (6) 自己原因としての神に対する批判については、EN138-139、CM158 も参照。
- (7) CM157 には本引用と類似の記述が見出される。
- (8) この点に着目する Clavier (2012; 2015) は、サルトルが神による創造の放棄を目指していると言う (pp. 494-495; pp. 73-74)。
- (9) Royle (2005) によれば、サルトルは、哲学界に流布する創造概念の不可能性を、自らの創造概念の利益となるように証明していると言う (p. 75)。
- (10) 根木 (2019) は、サルトル哲学における神概念の特徴の一つとして、神が人間のイマージであると言う (174 頁)。
- (11) 谷口 2000: 71-72 を参照。
- (12) 「真の創造は、〈存在〉のもとで遂行された変容によって現れ、実現さ

- れる。」(CM167)
- (13) 『道徳論ノート』における「存在」の概念は多義的であるが、しばしば大文字と小文字で意味が区別される。大文字の場合は、個別化以前の「存在」を指し、小文字の場合は、個別化以後の「存在」を指していると解釈できる。
- (14) この点については、澤田 2002: 73-104 が詳しい。
- (15) 『道徳論ノート』において、創造が二つの具体的なタイプに基づいて分析されている箇所は、主に二箇所ある。一箇所目 (CM457-463) では、建築家による現実の家の創造と、画家による絵画上の家の創造に分けられている。二箇所目 (CM552-570) では、技師と芸術家の創造に分けられている。両者の箇所には重なる議論がしばしば見出せるため、本稿では、建築家を技師のうちに、画家を芸術家のうちに含めて解釈する。
- (16) 『道徳論ノート』において大文字の「存在」は、大文字の「自然」や「即自」といった概念に言い換えられることがある。
- (17) サルトルは、『存在と無』のなかで私が示したように、必要はそれ自身の欠如である一つの存在においてのみ生じうる」(CM552) と言う。しかし、『存在と無』では、欠如者として人間が記述される際に「欲望 (désir)」という語が使用されている。そこに表記の揺れがあることは否めないが、彼の言に従い、『存在と無』の「欲望」は、『道徳論ノート』の「必要」に該当するものと見なす。ちなみに、『道徳論ノート』の「欲望」は、芸術家の創造における鍵概念である。
- (18) サルトルは、「道具的領野」や「道具的存在」という術語をしばしば用いるが、これは、存在者の存在様相を道具的存在性としてカテゴリー的に規定したハイデガー (SZ71) からの影響であろう。
- (19) 以上のような技師の創造は、アーレントが言うところの人間の根本的活動力の一つである、「仕事 (work)」を彷彿とさせる (HC136-159)。例えば、仕事によって産出される物が客観性を持つ点、仕事の過程で全ての物が手段に墮して価値を喪失する点は、技師の創造に重なると言える。サルトルの創造論とアーレントの分析との比較検討は、別の機会を試みたい。
- (20) Imr41-42, 46, 363-364 も参照。
- (21) この点について森 (2015) は、「望ましい」という語が使用されているからといって、提示される世界が人々にとっての幸福な世界である必要はなく、重要な点はその世界が一つの価値観を惹き起こすことで

あると指摘する（166頁）。

(22) Simont 1992: 188、谷口 2000: 74-75 を参照。

(23) ここでの「一つの存在」とは、存在それ自体というよりも、アナログンとして機能する存在者ほどの意味であると解釈できる。

(24) さらに付言すれば、想像力の契機は、芸術家自身のみならず、芸術作品を観る者のうちにも生じるのである。

## 文献表

本稿において略号の後の数字は、原著の頁数を示している。『道徳論ノート』からの引用は、筆者の拙訳である。

### ※訳出について

- ・原著においてイタリック体で示されている箇所は、傍点を付している。
- ・原著において大文字で始まる語は、〈 〉を用いている。ただし、一般的に大文字で始まる語（例えば、神（Dieu）など）は除く。

### 【一次文献】

#### I. サルトルの著作

CM Sartre, Jean-Paul., *Cahiers pour une morale* (Paris : Gallimard, 1983). 未訳。

※『道徳論ノート』には英訳版が存在する。訳出の際に英訳版を参照した箇所もある。 *Notebooks for an Ethics*, translated by David Pellauer (Chicago & London : The University of Chicago Press, 1992).

EN Sartre, Jean-Paul., *L'Être et le néant : essai d'ontologie phénoménologique* (Paris : Gallimard, édition corrigée avec index par Arlette Elkaïm-Sartre, Collection Tel, 2016). 『存在と無——現象学的存在論の試み』松浪信三郎訳（I・II・III、筑摩書房、2007a年・2007b年・2008年）。

Imr Sartre, Jean-Paul., *L'Imaginaire : psychologie phénoménologique de l'imagination* (Paris : Gallimard, édition revue par Arlette Elkaïm-Sartre, Collection folio/essais, 1994). 『イマジネール——想像力の現象学的心理学』澤田直・水野浩二訳（講談社、2020年）。

QL Sartre, Jean-Paul., *Qu'est-ce que la littérature?* (Paris : Gallimard, Collection idées, 1972). 『文学とは何か』加藤周一・白井健三郎・海

老坂武訳（人文書院、改訳新装版、2015年）。

## II. アーレントの著作

- HC Arendt, Hannah., *The Human Condition* (Chicago & London : The University of Chicago Press, second edition, 2018). 『人間の条件』志水速雄訳（筑摩書房、1994年）。（独語版からの邦訳書である、『活動的生』森一郎訳（みすず書房、2015年）も参照した。）

## III. ハイデガーの著作

- FT Heidegger, Martin., “Die Frage nach der Technik”, in *Vorträge und Aufsätze, Gesamtausgabe*, Band 7 (Frankfurt am Main : Vittorio Klostermann, 2000), pp. 5-36. 「技術とは何だろうか」、『技術とは何だろうか——三つの講演』森一郎編訳（講談社、2019年）所収、95-156頁。
- SZ Heidegger, Martin., *Sein und Zeit* (Tübingen : Max Niemeyer, 13 Aufl., 1976). 『存在と時間』細谷貞雄訳（上・下、筑摩書房、1994a・1994b年）。

### 【二次文献】

- Anderson, Thomas C., *Sartre's Two Ethics: from Authenticity to Integral Humanity* (Chicago & La Salle : Open Court, 1993).
- Clavier, Paul., “Le jeune Sartre et le vieux Sertillanges : le chassé-croisé de la création”, dans *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, tome 96 (mars. 2012), pp. 493-511.
- Clavier, Paul., “Sartre and Sertillanges on creation”, in *The Review of Metaphysics*, vol. 69, no. 1 (Sep. 2015), pp. 73-92.
- Münster, Arno., *Sartre et la morale* (Paris : L'Harmattan, 2007).
- Royle, Peter., *L'Homme et le néant chez Jean-Paul Sartre* (Québec : Les Presses de l'Université Laval, 2005).
- Sicard, Michel., *Essais sur Sartre* (Paris : Galilée, 1989).
- Simont, Juliette., “Sartrean Ethics”, in *The Cambridge Companion to Sartre*, edited by Christina Howells (Cambridge : Cambridge University Press, 1992), pp. 178-210.
- 澤田直『〈呼びかけ〉の経験——サルトルのモラル論』（人文書院、2002年）。
- 谷口佳津宏「『道徳論ノート』における創造の問題」（理想社『理想』第665

号（特集サルトル・今）、2000年8月）、67-75頁。

根木昭英「二つの「自己原因」——サルトルにおける神の問題」（日仏哲学会『フランス哲学・思想研究』第24号、2019年9月）、167-178頁。

ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』（昭和堂、2021年）。

水野浩二『サルトルの倫理思想——本来の人間から全体的人間へ』（法政大学出版局、2004年）。

森功次「前期サルトルの芸術哲学——想像力・独自性・道徳」（東京大学大学院人文社会系研究科、博士論文、2015年3月）。